

モンゴルにおける幼児教育の現状と課題 - JICA シニア海外ボランティアとしての活動から -

講師 松村美智子氏（現 JICA シニア海外ボランティア）

日時：2004年5月19日(水) 13時半～16時半

場所：お茶の水女子大学 子ども発達教育研究センター プロジェクト室

主催：お茶の水女子大学 子ども発達教育研究センター

1. モンゴルの現状

(1) 共産主義から自由主義へ

モンゴルは、共産主義国から自由経済国になって12～13年である。モンゴルは、たまたまソ連が解体して必然的に自由主義になった。したがって、10年たっても共産主義的な教育の傾向が色濃く残っている。学生も上からしつけられた硬い教育をうけており、創造性が育っていないという印象がある。幼児教育でも、子どもの自由な発想を生かす教育体系がまだまだ整っていない。

(2) 人々の生活

人口は260万人。18の県があり、ウランバートルは中央県にある。中央県の人口は80万人であり、全体の約1/3が集まっている。地方の遊牧生活が成り立たなくなっているため、都会での現金による生活を求めるという傾向を表しているのであろう。ウランバートルの周辺では、ゲルというテントをたてて集落をつくっている。（昨年度までモンゴルは土地代がいない）。

貧富の差が大変大きい。貧しい地域では、水道やトイレがなく衛生状態が悪い家が多く、そのような環境に子どもたちがいる。又マンホールで生活していたり、学校にも行けない子もいる。

その地域では石炭で暖を取る生活なので、排気ガスにより空気がとても悪い。その状況が、長年改善されていない。

2. モンゴルの教育システム

(1) 大学までの教育システム

3～7歳：初等教育

8歳～15歳：中等教育。8歳からが小学1年で、15歳まで義務教育。

16～18歳：高校。2年間。

18～21歳：大学。大学に行かない者は、高卒後1年間職業訓練を受ける。

2005年に教育改革がなされ、7歳から1年生となる。小学校の先生が国語を教えに来ているという幼稚園もあった。

(2)就学率、その他

初等教育（幼児教育）の就学率は、全国平均30%、ウランバートルでは60%。学校は2部制であり、1・3・6年生が午前、他が午後などと学年により分かれている。3部制の学校も出てきている。建物は、共産主義の時代のもので、日本の幼稚園よりも立派で部屋数も多い。

3. 幼稚園教諭養成大学について

(1)概要

モンゴルの大学は、基本的にほとんど全てが国立である。自由化後は、小さな私立大学が建ち始め、現在は専門学校のような小さな大学がたくさんある。

国立教育大学の12の学部のうち、そのうち1つが幼稚園教諭育成大学。その大学の学生数は、約600名（学長の話では）。しかし実際は、もっと少ないようである。学生は、80%が、田舎から集まっている。学費が続かないなどでドロップアウトする学生が多い。これはどの大学でも見られる。教職員は約30名で、その他職員は10名。

午前、午後、夜間、季節校というシステムがある。季節校とは、全国の幼稚園教師達が、単位をとるために季節限定で通ってくるものである。

(2)教育内容

基礎学、心理学、専門学がある。松村さんは専門学の授業を担当している。様々な授業を見学したが、全体的に、西欧の教育の情報が非常に乏しく、共産主義時代に学んでいた情報を今でも学んでいる。音楽では、学生のほとんどは譜面が読めない。また、体育では、軍隊式の行進などをしていたりする。なかなか不必要な面をカットできないというのが現状である。

専門学では、「五感の教育」というものがあり、これは日本の幼稚園にはない教育である。色々な食べ物の刻んだものを持ってきて、見て味わって、物とリンクさせたりする。大学生が子どもに授業するときのサンプル授業として行なう。また「自然についての教育」では、色々な動物についての授業である。動物のフィギュアを20種程度用意して、名前を聞いたり、足が4つあるのはどれか、草食か肉食かなどの分類をさせたりする。その他、美術や音楽や数など、1年間の教育で必要な全ての内容を網羅できるようになっている。

体育の指導では、日本からパラバルーンを持っていった。それをういて活動をまとめるように、4年生に課題を与えたが、意見を言い合うばかりで自分たちでまとめられなかった。しかし全体的に学生たちの反応はとてもよく、発問したらすぐに返ってくる。

実習は、2~4年生で行なう。この実習に関して、大学と現場の先生と学生の三者の懇談が毎年あるが、学生からは、2年生で専門課程にも入っていないのにいきなり子どもに教えるのは難しい、という意見があった。また先生からは、学生達は実習にきたのに何もできない、大学は何をしているのだ、という意見があった。また、学生から、松村さんから教わった新しい指導法を用いると、現場の先生達による実習の評価が低なり良い点数に結びつかないという意見があった。評価では、政府の監督がいきなり来て、子どもに詩の暗唱、歌、数などを抜き打ちで答えさせ、それが担任、園長、幼稚園の評価などにつながってしまう。

(3)施設・教材

教育大学の予算は乏しい。教材教具がとても少ない。椅子も、ほとんどが壊れている。蔵書はとても少なく、あっても古いロシアのものやモンゴルの民話である。幼児関係の絵本は、少ない。

教育内容が古い。幼児教育の基本は発達心理だが、ソ連の知識がメインで西欧の発達心理の知識には乏しい。

楽器がないため、シンセサイザー、タンバリン、カスタネット、リングベルを JICA より寄贈した。学生や現場の先生たちにも、大変喜ばれた。

4. モンゴルにおける幼児教育の現状について

(1)組織

幼児の数は、1 園あたり 300～350 人程度。3～7 歳とされているが、2 歳半くらいの子どもがいる場合もある。

1 つの幼稚園内の組織では、園長、クラス担任、助手、音楽教師・体育教師（園によって）がいる。25 人の子どもを担任と助手の 2 人で見ている。壁に職員の評価表が貼ってある園もあった。新しい教材や教育を子どもたちに行なえば、評価が上がる。新しいことに対しては、貪欲に収しようという意欲がある。

(2)保育の概要

保育時間は、9 時頃から、17 時ころまで。午前中に、国語や算数の授業がある。自由遊びの時間は、授業と授業の間のみしかない。夏休みは、6～8 月。

給食は立派で、スープと肉。助手が配膳の準備する。食事中は、大変静かで生活指導がいきとどいている。トイレでも、歯ブラシや石鹸箱が 1 人分ずつ、きちんと並べている。歯みがきや、手洗いなどはきちんと指導されている。

物が多くある国ではないため、ワークブック等の冊子類は、見られなかった。算数や国語の事業では、線が書いてあるノートに、スペルや数字を書く。算数の道具箱のようなものがあつたが、先生の手作りであった。

6・7 歳では、モンゴル文字、キリル文字（ロシア文字）を学ぶ。自由化後、モンゴル文字が使えるようになったが、それ以前は禁止されていた。また 7 歳の算数を見学したところ、レベルがとても高かった（ $65 + x = 85$ など）。算数・数学重視の教育である。

画一的な、トップダウンの教育方法である。子どもが自主的でクリエイティブに、という考え方が欠落している。子どもたちは、おそらくグループ学習の経験がないだろうと思われる。教科書もノートも開いていない子どもに対して、「なまけもの」で片付けて、どの教師も何のアクションもしないなどの場面が見られる。昭和 25～26 年ころの日本の教育と同じであると考えられる。

子ども 1 人ずつの評価表があり、優良児童の表彰がある。モンゴルの教育自体が、エリート教育である。飛び級もある。

(3)描画活動

モンゴルでの描画の基本は、模倣からであり、皆が手本を見て同じ絵を描く。これは指導要領にも明記されている。模倣させる意図を教師に尋ねると、「子どもは描き方を教えてやらないと、描く術がない。描き方は模倣の中から学ばせる。描けるようになったら、自由に描かせるのだ」ということであった。子どもの描く心、子どもの想いを考える、ということがモンゴルでは欠けているように思われる。先生の教育的意図が最優先され、指導要領もすべてその姿勢である。

(4)音楽活動

ダンスコンクールがあり、子どもに大人のワルツやタンゴなど、大人の踊りをさせる。格好も大人のようにさせる。見物している人々を見ていると、ワルツなのに2拍子で手拍子しており、ワルツのリズムを全く知らないことがうかがえた。これは、リズム楽器を経験していないためであろう。リズム楽器を導入することが必要だと感じた。

モンゴルでは、子ども全員、一斉に楽器を持たせて指導するのではなく、一部の選ばれた子のみが使い、他の子は見ているだけである。(カスタネットを、5つだけ借りにきたりする。その場合は、全員分を貸し出すようにして、全員が一斉に使うように指導した。)

(5)教師

日本では園内研究会というものがあるが、モンゴルでは園内には研究会がなく、優秀教師コンクールがある。しかしそのコンクールでは、子どもが主役ではなく、先生の指導の技術はどうか、という視点から評価を行なう。全国から勝ち抜いてきた教師が、全国大会に出場する。前日に年齢などが決められるため、教師は一晩で教材作り、指導案作りをする。授業に沢山の教材を用意していたが、それらは教師の視点で製作されたものが多く子どもの興味や関心に視点を置いた物は少ない。

音楽の授業は音楽の専門の先生が行っている。幼稚園の先生はピアノがほとんど弾けない。音楽の先生がいるところといないところがある。体育についても同様。

5.大学側にどのような役割が期待されているのか

モンゴルの幼児教育は、ソ連に準拠しており古いため、モンゴルの大学教員を日本に呼び、今の時代の発達心理学を学ばせてほしい。

また、モンゴルから日本に来て幼稚園の授業を観察しても、立派な道具があったなど教材面のみしか注目しないことが多い。観察後、研究協議会をするなど、観察したことを振り返りディスカッションする場が必要である。